

# 《群馬・渋川金島のみち—火山・河岸段丘・製鉄の風土》の 歴史風景論

## ——司馬遼太郎『街道をゆく』に基づく 「感性哲学」の応用実践として——

桑島 秀樹

広島大学大学院総合科学研究科

# Historical Landscape of “the Road of *Kanashima* in Shibukawa, Gumma”: An Essay Employing the KANSEI-affective Philosophy Developed in Ryotaro Shiba’s Travel Writings *Kaido wo Yuku*

KUWAJIMA Hideki

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

**Abstract:** In this paper, we originally examine to write another version of Ryotaro Shiba’s historical travel essays: *Kaido wo Yuku*, whose topics he did not deal with well. Our topics is specifically focused on Kanashima region in Shibukawa city, Gumma, Japan, which is located at the *interface*, or boundary between plains and mountains in the Kanto district. This region contains volcanos, as well as remains of ancient iron factories and horse pastures. We aim to illustrate the *Kanashima* region via a multi-layered historical landscape, employing the interdisciplinary Shiba’s KANSEI-affective philosophy. Our portrayal is characterized by his keen insight, which penetrated the deepest historical layer at the local sites. Thus, the present

work is supported not by a rigidly philological approach, but by a hands-on and imaginative approach based upon the field experience.

はじめに——『街道をゆく』にみる「感性哲学」とは何か

本稿がねらうのは、歴史作家・司馬遼太郎（1923～96）が四半世紀（『週刊朝日』、1971～96年連載）にわたり書き継いだ歴史紀行『街道をゆく』を対象に、そこで採用されていた独自の「手法」と「語り」を探り、それを援用することで新たなシリーズを紡ぐことである。ここでは、「西の人」司馬が書くことのなかった土地、あるいは、書くことが叶わなかった文化風土に焦点が当てられる。つ

まり、司馬が見残した風景を、「続編」として綴るということだ。したがって方法としては、フィールドでの筆者の実体験を補助線に、考古学・民俗学・宗教学・地理学・地質学・火山学・文献史学・科学技術史学・美学＝感性学といった複数の領域を横断していく。結果、本稿は、古代から現代までの時空をつなぐ複層的風景論となろう。筆者はここで、『街道をゆく』から抽出しうる独自の風景読解法を、「感性哲学」と名づけ、その応用実践を試みることになる。

では、司馬の「感性哲学」とはどんなものなのか。これについては、すでに筆者の最近刊行の論考（初期『街道をゆく』シリーズの「湖西の道」・「韓のくに紀行」が考察対象の2019年3月論文）<sup>1</sup>でも書いた。したがって、やや繰り返しになるが、以下簡潔にその定義を概観しておく。司馬の手法は、まずフィールドに臨んで、そこに在る風景——土地が胎蔵する歴史をも含む地勢・景観——を読み解くものだ。ひとまず現場で五感すべてを開いて、土の匂いや足裏の感覚まで大切にす。そして歴史風景の古層をじっと凝視し、最終的にめいっぱい想像力の翼を羽ばたかせる。こうした態度のことだ。だから、それは、現場主義に根ざした「眼の思考」<sup>2</sup>とも評される。これを、土地々々で積み重ねられた歴史のレイヤーを見通す「感性の考古学」と呼ぶこともできよう。

『街道をゆく』が、もし謹厳実直な文献ガクシャによるシリーズ論集ならば、史料に残る文字記述に忠実にその字面を「写す」ことが求められよう。後代へと歴史的事実の正確な「記録」こそ、そこでの目的だからだ。しかし、司馬の「感性哲学」は、そうしたガクシャ的態度のくびきを身軽にすり抜け、いっそう壮大な文明精神史のうねりを描きだしていく。書斎の司馬は、すみずみまで穴があくほど地図を眺めわたす。古書店街の関連書が消えるくらい書物を漁り<sup>3</sup>、地方郷土史家のマイナーな研究冊子まで読み込む。そしてフィールドに出て現場の「風景」のなかに佇み、過去の「人間」を取り巻いていた気配を肌で感じ、膨大な書物知に裏打ちされた「歴史的＝文学的想像力」を駆動させる。つまりそれは、「記憶」の歴史をつ

むぐことにほかならない<sup>4</sup>。司馬自身、『街道をゆく』の執筆動機をふり返り、次のような象徴的な文言を残している。

「たとえ廃墟になっていて一塊の土くれしかなくても、その場所にしかない天があり、風のにおいがあるかぎり、かつて構築されたすばらしい文化を見ることができるし、その文化にくるまって、車馬を走らせていたかほそげな権力者、粟粥の鍋の下に薪を入れていた農婦、村の道を歩く年頃のむすめ、そのむすめに妻問いする手続きについて考えこんでいる若者、彼女や彼を拘束している村落共同体の倫理といった、動きつづける景色をみることができる。」（司馬遼太郎「私にとっての旅」『ガイド 街道をゆく 近畿編』、1983年<sup>5</sup> 初出）

風に吹かれた土くれから、人間が、村が、そして、その時代に生きていた文化そのものが、過不足なく鮮やかに、叙述の進行とともにリアルに現前してくる。ここにあるのは、文献ガクシャとはちがった、いわば「旅する感性」そのものたる司馬による歴史叙述のスタイルといえよう。ここでの司馬の述懐は、「現場主義」ならびに「歴史＝文学的想像力」の重要性を、その「語り」において教えてくれている。ガチガチの文献主義から一歩前に、否、半歩だけ前に、思い切って踏み出した歴史叙述のあり方が示されている。

蘇った過去の人々の交わす会話が、じっさいには「フィクション（文学的虚構）」の産物であったとしても——古代ギリシャの哲人アリストテレス（『詩学』第9章）も言うように——それは過去に存在した文化の「普遍」を射抜くまなざしを持つ。確固として在ったものの「記憶」が人格を得て、そこに受肉している。ここでいう「人格」とは、人間ばかりでなく、そこに存在する山河など天地自然の景物にも適用可能なものだ。これこそまさに、『街道をゆく』シリーズをつらぬく独自の「感性哲学」であり、結果として、訪れた土地の礼讃を通じてリアルに過去を受肉させる総合科学的＝分野融合的な風景読解法の提示となっている。

## 1. 22歳の司馬遼太郎と坂東武者の地

本題に入ろう。司馬は、「毛野のみち」というような主題の紀行を、『街道をゆく』シリーズに入れていない。ただし、上毛野（かみつけぬ）すなわち今の群馬県、および、下毛野（しもつけぬ）すなわち今の栃木県、これらの土地にまったく関心がなかったわけではなかった。否、むしろ、1945年8月15日、彼が22歳の「戦車兵・福田定一（ていいち）」として敗戦を迎えた栃木・佐野については、いつかは歩かねばならない「道」だと認識していた。司馬自身がしばしば述懐したように、その後の彼の著作の多くは、終戦時の「22歳の自分に向けての手紙」<sup>6</sup>でもあった。爾来ふつふつと沸き起こった「どうして日本人はこんなに馬鹿になったんだろう」との切実な思いを胸に、作家はずっと自問自答を重ねながら、ひたすら書き連ねてきたのである。

「佐野」をめくり、まずもって司馬は、古い歴史に関心があったと思われる。そこは「坂東武者」の精神を象徴する謡曲「鉢木（はちのき）」の舞台、すなわち、鎌倉末期の「坂東武者」佐野源左衛門・常世の「いざ鎌倉」の物語の土地だった。大雪の降る日、貧家の主・常世は、旅僧姿に身をやつした執権・北条時頼を精一杯もてなす。しばらく後、「鎌倉一大事」の報を受けたとき、常世は最小限の武具を身に纏い、おっとり刀で「馬」を駆って鎌倉へと馳せ参じたという、あのエピソードだ。

司馬自身の毛野体験はこうだ。戦車兵だった彼は、中国東北部、具体的には旧陸軍の駐屯地のあった旧満州東部の牡丹江近郊の町——旧ロシア国境まで約20キロの場所——から日本へと移送される。行き先は機密情報として知らされていなかった。朝鮮半島の釜山港から、日本海を経て新潟に至り、そこからまず群馬まで汽車に寄せられる。このとき将来の歴史作家は、車窓から、「坂東武者」が駆けめぐった東国の大平野をはじめて眼にしたのであった。そして、この時に見た関東平野とその地に生きる人々に対する感慨は、「坂東」風景の断片スケッチという趣きで、小文「私の関東地図」（『司馬遼太郎が考えたこと10』新潮文庫、2005年、所収）<sup>7</sup>に収められている。

司馬は、最終目的地たる栃木・佐野——九十九里浜（あるいは湘南）への連合軍の侵攻を想定した最終防衛線にして戦車隊の配備地——に到着するまえ、群馬・相馬ヶ原において短期間の駐屯を命ぜられる。作家は、自身のこと、すなわち、陸軍の青年戦車兵・22歳の福田定一のことを思い出しながら、北毛の城下町・沼田を通過後、関東平野がぐっと眼前に展開しだす前橋の駅舎に降り立った際の様子を、次のように綴っている。

「沼田の盆地は、陽（ひ）の下で見た。

前橋で降り、そのあと桑畑のあいだの道を徒歩で西方の相馬ヶ原（箕輪（みのわ）町〔現高崎市・箕郷町〕）にむかったときは、はじめて見る関東平野というものの広さにおどろいてしまった。」（『司馬遼太郎が考えたこと10』、一一八頁）

司馬は、「こんな広いところが、日本にもあったんですね」と責任者の「騎兵くずれの老中尉」に言うと、「子供っぽいことをいうな」と叱られたという。司馬は、満州の野とこの広大な日本の平野とを比べていた（同書、一一九頁）。

彼にとっては、東国の「火山の風土」もまた、はじめてである。

「私は、火山も知らなかった。

榛名（はるな）、赤城（あかぎ）という、山頂に火口湖をたたえて裾野（すその）を大きくひろげている円錐（えんすい）状のかつての火山が前面の視野いっぱいを占めていて、その四合目あたりから裾野が大傾（おおかし）ぎにかしぎつつこちらへひろがってきて、さらに背後へひろがりつづけ、ついに東京にいたんだろうと思うと、空が落ちてきても大丈夫なひろがりのようにさえおもわれた。」（同書、一一九頁）

司馬と同じ戦車連隊の「小父（おじ）さんのような」中尉は、司馬の感慨にまったく同調しなかった。この中尉は京都生まれの京都市育ちという。そして彼は、「こんなところ、空と桑畑があるだけじゃないか」と一蹴する。この中尉の言葉に触発され、司馬はこの日の自分について「土霊でも憑

(つ) いてどうかしていたかもしれない」と述べて、このような大きすぎる「空」が、まさに上州の近代詩人・萩原朔太郎を生んだのではないかと文学的想像をひろげていく。「……ともかくもこの日の上州の空は大きすぎ、なにか言葉でうずめないと歩いていられないほどであった。」(同書、一二一頁)、と。彼にとっては、桑畑で寝転んで仰ぎみたとびきり広い空は、ある種の創造的な詩的言語でも埋めないと耐え難いものだった、というわけだ。

## 2. 「風景を読む」感性の処女地—— 原点「群馬・渋川金島のみち」を 歩く

司馬は、はじめて体験した「毛野」ないし「坂東」の風土に対して、なんとも初心な、しかし衝撃的な印象を書き残したと言えよう。ただ結果的に、この印象を『街道をゆく』の紀行として結実させることは叶わなかった。そして、まさに本稿は、司馬が書かなかった「毛野をゆく」の紀行を、彼の「感性哲学」の手法に則り、応用実践する試みなのである。つまり、司馬独自の手法を内在化しつつ、彼の関心を筆者の関心と交叉させて、オリジナルな『街道をゆく』続編を紡いでみよう、ということだ。

ここで、『群馬・渋川金島のみち』と銘打って、特定の地域をあつかうのは、この土地がまずもって筆者の——生まれ故郷であって——もっとも熟知したフィールドだからだ。まさに「風景を読む眼」を養った原点でもある。ただ、もうすこし大きな視野からこの「渋川金島」をあつかう理由を説くならば、この地が、関東平野と東北・陸奥の山岳地帯が接する「インターフェイス」だと考えられるからだ。筆者はおそらく、「西の人」司馬とは異なり、「火山の風土」のなかで培われた観察眼をもつ。司馬の眼が見残した東国ないし坂東の風景を、その風景の内奥に息づく人文まで見通す歴史風景論を、「感性哲学」という視座から描こうとしている<sup>8</sup>。

かの地における筆者の「眼」の鍛錬のひとコマを、雑多なイメージの群れとして、以下簡単に紹

介しておこう。物心のつく10歳前後の頃だったと思う。田畑の畦など自宅近郊のそこここに——つまり少年たちの秘密の遊び場の周囲で——縄文・弥生期の土器から平安期の須恵器や鉄滓（かなくそ／正式には「テッサイ」）などを見つけては、嬉々として菓子箱に蒐集していた。町の広報誌の告知をめざとく見つけ、地元郷土クラブ主催の旧跡探訪の会合に独り参加したこともある。あるときなど、半ば土に埋もれた巨きな自然石製の庚申塔に江戸期の先祖の名——桑島織部——を見つけて胸を高鳴らせた。またあるときには、農家の三男坊（7人兄弟姉妹の下から2番目）である父の「本家」での親族の集まりで、伯父や伯母の口を突いて出た「シシ土手」（＝猪・鹿など害獣除けの土塁）の話に耳をそばだてた。

このような少年時代の癖は、現在の筆者においても、たぶんほとんど変わっていない。変わったとすれば、その後、多少の書物知を得たことだろう。『街道をゆく』に刻まれた「感性哲学」はもとより、宮本常一の「あるく・みる・きく」の民俗学（ちなみに、司馬も「私自身、宮本学に親しんだのは、よほど古いつもりでいる」<sup>9</sup>といっている）。あるいは、ゲオルク・ジンメル——「アルプス美学」「廃墟の美学」に見られた——空間力学的な風景分析法<sup>10</sup>、などだ。

だから、2012年12月10日（群馬県埋蔵文化財調査事業団による発表）、榛名山の大噴火に際して甲冑を着たまま被災した古墳人（甲装着人骨）が出土したとのニュースが飛び込んできたときには居ても立ってもいられなかった。まさに筆者の父祖伝来の地——幼少年期に慣れ親しんだ場所——に眠っていた「金井東裏（かないひがしうら）遺跡」での世紀の大発見である。その年の年末の帰省時、すぐさま現場の「風景」的布置の再確認に走ったのは当然のことだった。その後この遺跡周辺は、吾妻川対岸の黒井峯遺跡とともに「日本のポンペイ」と名指され、「火山灰考古学」の最前線と目されるようになる。

このように、群馬の大地、ことにそのほぼ中央に位置する「渋川（しぶかわ）」・「金島（かなしま）」は、その風景のなか、筆者が肉迫すべき幾重もの歴史のレイヤーが重なる唯一無二の土地なのであ

る。この土地は、司馬が前橋に降り立った際に眼を見張った、驚くほど広大な空の下にある「関東平野」ではない。山が終わり、その平らかな野が「坂東太郎」利根川の下流域へと展開しはじめる、まさにその「フロント（前線）」に位置しているのである。

以下、まず群馬・渋川市域の、ことに金井集落を含む「金島」地区の自然地理を語り、そこに点在する歴史的ランドマークの点と点を結びながら、かの地の歴史記憶をあぶりだしていきたい。「司馬の眼」で——ときに彼の眼を超えて——大地の奥底の鼓動にまで耳を澄ませば、きっとこの大地の息遣いに触れることができるはず。そう、信じている。

### 3. 扇状にひろがる関東平野の「かなめ」 ——渋川金島の山河地理

扇状にひらけた関東平野の中央部を流れる「坂東太郎」利根川に沿って遡ると、ちょうどその「かなめ」の位置で、群馬県西部の浅間・草津方面から流れくだる吾妻（あがつま）川と交わる。「渋川」（平成の大合併以前の旧市域）は、ちょうどこの二つの川がY字型をなす合流点西側の扇状台地上にある<sup>11</sup>。別言すれば、河川が中流域から下流域に広がる突端部で、榛名山東麓の広い地域をカヴァーする「坂」の町だ。利根・吾妻の両河川をはさみ、東には「赤城（あかぎ）山」（山頂は現前橋市）を望む。西には「榛名（はるな）山」（山頂は現高崎市）が控える。「渋川」の地名由来には諸説あるが、一説に川が合流して「澁る（シブる：水が留まる）」ところの意とも、一説に川が製鉄の鉄滓で赤茶色く濁るところの意とも言われている。なお、榛名も赤城も、いま小休止中のカルデラ型活火山であり、旧火口の山上湖を中心にそれを取り囲むように外輪山が連なる。渋川からよく見えるのは、伊香保温泉をはさんでその上下に位置する水沢山と二ツ岳だ。

「金島」は「カナシマ」と読む。榛名山の北東麓、西（榛名山系の北側）から東へと流れていた吾妻川が、この金島地区あたりで、ゆるやかな弧を描きながら90度流れの向きを変え、南に下りだす。

その吾妻川をつくる大きなカーヴに沿って幾つかの集落が展開してきた。北から、「祖母島（うばしま）」・「川島（かわしま）」・「南牧（なんもく）」・「金井（かない）」・「阿久津（あくつ）」である。ここが、旧金島村（1889年4月～1954年3月まで。1954年4月より旧渋川市に編入）だ。江戸期には、参勤交代の往還と同時に、佐渡への流人移送路であった三国街道の本陣宿場町「金井宿」も栄えた。

吾妻川の「吾妻」を「アガツマ（私の妻）」と呼ぶのは、日本武尊＝倭建命（やまとたける）が自分のために海に身を投げた妻・弟橘媛（おとたちばなひめ）をかの地で偲び、「ああ吾（あ）が妻（つま）よ」と嘆じた伝説に拠っている。この川は、現在も活動中の活火山・草津白根山（麓に草津温泉）に水源のひとつをもつ。だから、火山性強酸質の「死の川」で、昭和30年代からの石灰剤の投入がなければ魚も住めなかった。流域の土壌も酸性度が高いため農作物も限られ、土地の人々には厄介な存在だった。この吾妻地域のさらに南側には、もうひとつの著名な活火山・浅間山も控えている。浅間山麓には現在高原キャベツでその名が全国に知られる嬬恋（つまごい）村がある。

天明3（1783）年の旧暦4月初旬から7月初旬にかけての断続的な浅間山大噴火は、広範囲に凶作・飢饉をもたらす。麓の嬬恋村・鎌原集落はその噴火火砕流で壊滅した。そしてこの浅間の噴火泥流は、いまだ燃えさかる溶岩塊を巻き込みながら吾妻川を下り、「金島」の村々をも襲う。そして下位段丘面に位置する集落は、ほぼすべて埋もれてしまった。「川島」地区の川神を祀る延喜式内社・上野国四ノ宮「甲波宿禰（かわすくね）神社」も——この浅間火山泥流罹災まで「川島」の下位段丘面、具体的には川が屈曲し鎌首様突出部をなす「久保内」にあったが——も流された<sup>12</sup>。現在、本神社は上位段丘面の端山麓に移築されている。旧神社跡近く、ちょうど上越新幹線の高架橋（榛名トンネル出口～中山トンネル入口）が吾妻川右岸と交差する直下に、最大規模の「金島の浅間石」（南北約10メートル、高さ4・4メートル、群馬県指定天然記念物）がある。「浅間石（あさまいし）」というのは、泥流が遺していった真っ黒な巨大溶岩塊（焼け石）のことで、表面は火山ガスの抜けた

気泡痕に覆われゴツゴしている。「金島の浅間石」ほどの大きさはないが、今も——数十年前に比べずいぶん片付けられたが——金島地区の低い段丘最下部の田畑内には、大小さまざまなこの種の溶岩塊を認めることができる（こうした浅間石は、渋川～前橋にかけても認められる）。

川島地区のすぐ下流域が「金井（かない）」となる。「金井」の「金（カナ）」の字は、古来この地で川砂鉄採取による鍛冶製鉄が盛んだったことに由来すると考えられる。榛名山東麓に広がる「渋川」・「金島」地区には、上段の軽石層からなる扇状台地から最下段の吾妻川流域まで、幾つかの段丘面にとまなう大小の坂道（段丘崖）が多い。金井集落の南端、段丘面を一段下った田地の縁にあるのが——先述した筆者の原風景でもある——「金井製鉄遺跡」だ。9世紀末のタタラ製鉄の遺構で、低い段丘崖を掘り込んだ石組式製鉄炉跡と数基の炭窯跡からなる。

#### 4. 関東平野の果つる地——金井と川島の境界、あるいは「登沢峡谷」

さてここで、金島地区の自然地理のことを考えたい。筆者はここまで、地区西側に展開する榛名山系の外輪山——際立った山容をしめす伊香保温泉直下の「水沢（みずさわ）山」（正式には「浅間（せんげん）山」）——から、扇状台地上に幾つかの段丘面を刻みながら東側最下段の吾妻川へと至る《東西方向のベクトル》のことを念頭におきつ本稿を綴ってきた。しかし、ここからはしばし、金島地区を考察の中心に据え、《南北方向のベクトル》のことを考えてみたい。

じつは筆者父方の実家は「金井」で、母方の実家は「川島」である。金井からその北側に位置する川島に抜けるには、旧三国街道にあたる県道35号線（現渋川東吾妻線）を北上することになる。旧宿場・金井宿の家並みを越え、宿の北限にあたる古刹・金蔵寺（こんぞうじ）を過ぎる辺り——金蔵寺北東の道向かいには金井の水力発電所がある——から、道は下り坂になり、川島まで左右に大きく屈曲するS字カーヴをなす。川島集落に入る手前、この屈曲したカーヴにあるのが、吾妻

川に流れ込む支流の「登沢川（のぼりさわがわ）」——地元では「ノボツァワ」と呼ぶ——で、その大カーヴの橋下は深く削りこまれた「小峡谷」となっている。筆者は、ここを「登沢峡谷」と名づけたい。この登沢川は、全長わずか5キロだが、水沢山麓近く金井集落西限の緯度の高い地域を水源に谷を穿ちながら岩間を流れくだる急流だ。ときに鉄砲水もでた。金蔵寺も正式には「登澤山照泉院」の名を冠していて、この沢が主要なランドマークであることを物語っている。ちなみに、金蔵寺の西上方に登沢川とさらにその支流「十二沢（じゅうにさわ）」との合流点がある。水源地が村落に近いこの十二沢の水が常時清流を保つことから、この沢の水を用水堰に導入するためにわざわざ樋——「二本樋（ニホンドヨ）」——が設置され、生活用水として金井宿まで引かれていた。

旧金井宿を北に進んだ「登沢峡谷」の手前、下位段丘面にある吾妻川右岸沿いの集落が「南牧」である。そこに三国街道の「空ヶ橋（もくがばし）の関所」があった。この関所の「渡し場」（流路の変化に応じ場所も変化）を経て、吾妻川の対岸（左岸）に位置する旧子持村の「北牧」「横堀」の宿場へと抜けるのが、三国街道の正式ルートだ。上位段丘面を走る県道を直進し、「金井」から「登沢峡谷」を越え「川島」に入るのは、ほんらいの三国街道から逸れる裏道「吾妻道」だった。

だから、現在の県道に沿い、「登沢峡谷」のおおきく湾曲する近代的高架橋を通して「川島」へと入っていくのは、同じ「金島」内での移動ながら、左右に屈曲しながら断崖の縁にかかる高い橋を越えていくため、大きな「断絶」「結界」を越える感覚がある——じっさい幼少期の筆者は、自家用車でこの「峡谷」を通過する際、その大カーヴが与えてくる不可思議な重力荷を経験したし、傾く車窓から谷間を覗き込むのは怖かった。「川島」に入ると、この県道は見通しの利く直進道となり、次の「祖母島」に至るカーヴまで、ほぼ一直線に続いていく（現在、「祖母島」にいたる手前の上川島地区に県道と直交する上越新幹線の高架橋が見える）。

なお、「川島」から「祖母島」のあいだにも、やはり「大輪沢（おわんさわ）」という川があって、

県道は上位段丘面の崖の縁を走りながら、「川島」と「祖母島」という二つの集落間を分断する「峡谷」を越えていく。その地名の示すとおり、「川島」や「祖母島」は、こうした小さな「峡谷」を境界とする「島」状の集落なのだ。これはまさに、「渋川」から「金井」までに認められる風景とはある意味まったく異なる地勢の現れだといってよい（さらに祖母島の北限には、遠く榛名湖から流れ出る「沼尾川」が刻む大峡谷——「箱島」との境界——が待っている）。

小括しよう。金島地区の「金井」と「川島」のあいだには、地形上の「大断絶線（グレイト・ディバイド）」があるということだ。この自然地理上の特徴は、「金島」の人文のあり方にも影響しよう——ちなみに「金井」の金蔵寺近くの地元小学校に徒歩で通っていた「川島」在住だった母とその姉妹（伯母と伯母）など、この「登沢峡谷」を斜に渡る高架鉄橋がいまだ存在していなかったため、深く切れ込んだ湾曲する断崖沿いを進み、峡谷最深部の短い橋を渡った後、ゴツゴツした岩だらけの山道を一段高みにある棚上の断崖上部まで登ったと証言している。

つまり、この「金井」と「川島」のあいだに截然と横たわる「登沢峡谷」は、関東平野から山間部へと入る最初の峡谷ではないか。そうだとすれば、この「登沢峡谷」こそ、まさしく「関東平野の果つる地」であり、江戸から広々と続く、司馬が驚愕した「空」の風土の北限のひとつなのである（なお、現在の渋川市は、広報上これを逆手にとって、「関東平野ここに始まる」<sup>13</sup>とアピールする）。本稿のあつかう主たるフィールド《群馬・渋川金島のみち》のおもしろさは、関東平野の辺縁部を、このように具体的なランドマークとして見究め、その風景を通じてそこに培われた歴史的人文まで読み解くことにあると言えよう。

## 5. 三国街道——「大名・奉行」「流人」は通り、「金（きん）」は通らず

続いて、江戸期の「三国街道」の往来のことを考えてみたい。《南北方向のベクトル》でいえば、こんどは「関東平野」の北端、金井宿のことが中

心となる。渋川宿からみたとき、ゆるやかな北方向への登り坂に形成された宿場町だ。

「天明3年の浅間噴火」以前は、金井にも川島にも、吾妻川沿いの低い段丘面に多くの集落があった。特に金井一帯は、その下位段丘面——現在は田地が広がっている——のなかを一直線に「鎌倉街道」が走っていた。近世においては、特に天明泥流による被災以降、多くの人々が「坂」を上り、里山の山裾に沿って集落を形成するようになる。その上位段丘面の金井地域に江戸期の宿場は形成され、そこを「三国街道」が走っていた。榛名山麓南東の最大の街・高崎を通る「中山道（なかせんどう）」から枝分かれした道だ。新潟では北陸街道の要衝「寺泊（てらどまり）」に通ずる道でもある。高崎方面から「金古（かねこ）」・「渋川」・「金井」・「南牧」・「北牧（きたもく）」・「横堀（よこほり）」・「中山（なかやま）」と続き、さらに群馬・利根水上（みなかみ）の宿場群を経て三国峠を越え、新潟・南魚沼の宿場群に至る。そこから、さらに長岡を通過して日本海に面する寺泊に至る。この街道の終着地を、佐渡への港町——良寛和尚の生まれた——「出雲崎（いずもざき）」とする場合もある。関東と越後をつなぐ主要な脇街道（正式には「脇往還」）である。江戸期には越後の諸侯の参勤交代、佐渡奉行、新潟奉行らの往来にも使われた。現在の国道17号線とはほぼ一致しているが、「渋川」から「金井」にかけては、上位段丘面の榛名山系の端山沿いのルートを採用。

「北牧」・「横堀」は、いわゆる「平成の大合併」（2006年2月）で新渋川市に編入されたが、もともと旧子持村で、金井の「南牧」から吾妻川を対岸（左岸）に渡った場所にある。だから、「南牧」には、碓氷峠に次いで主要な、上州第2の「入り鉄砲と出女」のチェックポイントである「空ヶ橋の関所」が置かれていた（最初は旧安中藩、次いで高崎藩の管轄。江戸後期創建の常番役宅・田中家屋敷が現存）。また、「渋川」は商業・農作物資の集積地として「市」<sup>14</sup>の立つ街だった。が、大名等が泊まる本陣と脇本陣を備えていたのは、この周辺では「金井」だけだった。このようなわけで、金井宿下段より続く吾妻川沿いの南牧宿の空ヶ橋が、登沢峡谷の「グレイト・ディバイド」に面す

る交通難所であると同時に、坂東の最終検問所として重要な機能を果たしていたのである。

さて、この三国街道を、「大名・奉行」と「流人」は通ったが、じつは佐渡産出の「金（きん）」や「銀（ぎん）」——じつは銀は金の約20倍採れた——は通らなかった。「金（きん）・銀（ぎん）」の輸送ルート、「御金荷（おかねに）の道」は、次のようなものだったからだ。佐渡金山のある「相川（あいかわ）」の佐渡奉行所に集められたものが、小木港（最終集積地は樹崎神社）から船で本州・出雲崎港へ。出雲崎での陸揚げのあと、北国街道を進み、「追分（おいわけ）」宿（現在の軽井沢付近）で中山道に入り、安中（あんなか）、高崎を経て、江戸まで運ばれた。

ここで疑問が2つ生じる。誰がどうやって重い「金（きん）」を運んだのか。そして、どうして「金」の輸送路に、三国街道は選ばれなかったのか。これらの疑問は、佐渡市役所産業観光部・世界遺産推進課のH氏への電話取材（2018年6月27日、後述のI氏への取材も同日）で解消された。なお、佐渡出身のH氏<sup>15</sup>は、すでに市の職員（佐渡市教育委員会）を定年退職したが、佐渡鉱山関連の歴史・民俗の専門知識を買われ、現在も嘱託職員として勤務している。ひとつめの疑問へのH氏の回答は、ひじょうに明快だった。

「伝馬（てんま）制の継ぎ送りですよ」

つまり、佐渡から江戸までのお付きの奉行所詰めの役人は2名程度で、あとは、通過する街道の各宿場を管轄する藩が、責任をもって次の管轄区まで輸送していたのである。「金の道」の主要な宿場には、「御金蔵（ごきんぞう）」が設えられていた。すでに佐渡を出る際に、金（きん）・銀（ぎん）の形態は、「竹流し金（あるいは銀）」と呼ばれるインゴット様に成型されていた（1620年代以降の何度かは、奉行所内ですでに金銀合金の「小判」にまで仕立てられた）。輸送も、当初は1年に2～3回、後に輸送負担の軽減のため1年に1回となる。その1回も次第に5月頃の日本海がもっとも風ぐ時期に固定していったという。

各藩の管轄区内では、農民の公事（公役）とし

て——すなわち労働による年貢たる「租・庸・調」の「庸」に当たるお上への奉仕活動として——この金・銀の輸送に携わった、とのこと。1回の運搬に50～60頭の馬の供出も必要で、これも輸送路沿いの農家から調達されたい。

こんな大金を輸送するのに、盗賊に襲われたことはなかったかを尋ねてみた。H氏によれば、これだけ頻繁に毎年おこなわれた輸送でも盗賊襲撃の記録はない、という。彼によれば、輸送される金・銀の量は、たとえ大盗人でも持ち去れるものではなく、監視の眼も厳しかった。また、かりに強奪できてもすぐに使えない代物であったはず、とのこと。

では、2つめの疑問。なぜ「金（きん）」は三国街道を通らなかったのか。これに対するH氏の応えは、あらかじめ筆者が予想していた理由と同じものだった。三国街道は、その最大の難所である群馬（上州）側から新潟（越後）側への「三国峠越え」がある。ここは2000メートル級の山と深い谷が連なる峠である。そのため、普通の大名・奉行の通行のためにも、「伝馬（てんま）稼ぎ」のみを目的とする「三国三宿（みくにさんじゅく）」——いずれも新潟・南魚沼に属する「浅貝（あさかい）」・「二居（ふたい）」・「三俣（みつまた）」——が特別に設けられた区間だ。このような難所を、重い金・銀を担いで越えることはとうぜん避けたかったという次第である。

このようなわけで、三国街道に面した渋川宿・金井宿を、佐渡からの金・銀が通過することはなかった。ただし、H氏によると、佐渡の「金（きん）」輸送の長い歴史では、輸送ルートの変更も何度かあったという。三国街道（あるいは、会津街道）もまた、非常時には一時的に「御金荷の道」になった、と。北国街道での水害や越後高田での地震といった不測の事態が生じたときだ。H氏いわく、そのような非常ルートを使った際、通常は「大名・奉行」そして「流人」の一行がメインで投宿する本陣・脇本陣には「御金蔵」はなかった。また、荷役夫たちの泊まる旅籠の数にも必然的な限界があった、と。このようなイレギュラーな金・銀輸送があったとき、いわば客層の違いを反映して宿場の収容能力にも限界が生じる。氏によると、



突然こんな過重な負担を強いられた街道沿線の諸藩も地域の民も、「二度とご免被りたい」と悲鳴をあげた記録も残る、という。

## 6. 金井宿本陣の「地下牢」跡をめぐって——島流しの「流人」の実相

このように、三国街道は、佐渡からの「金（きん）」は通らなかった。が、しかし、佐渡鉱山での労働力となる「流人」は、大名や奉行と同様に通った。では、この「流人」の実相は、どのような人々だったのか。永遠の「遠流（おんる）」の「島流し」を仰せ付けられた極悪非道の罪人や政治犯だったのか。はたして幕府の主要財源たる「金（きん）」を産む島に、そんな危険な人々を送り込むだろうか。そんな疑問を、ふたたび佐渡市役所のH氏に投げかけてみた。

「無宿人ですよ。たんなる町の浮浪者たちです。」

このように、この質問に対してもH氏の返答は明快だった。「無宿人（むしゅくにん）」とは、何かの犯罪等により、戸籍台帳（当時の「宗旨人別改（しゅうしにんべつあらため）」）から除籍された無戸籍の者で、係累からも絶縁され住所不定となった者たちのことである。つまり、佐渡鉱山に、こうした無職・浮浪の不良たちを、街場で「無宿人狩り」をおこなって連れてくる。江戸期も進み、「無宿人制度」——こうした者たちへの一種の職業訓練制度——が整うと、出稼ぎ肉体労働者の集団雇用を目的に、表向き「見せしめ」の対象として引き回されながら佐渡へと連れられていくことになった。H氏によると、上州（群馬）・武州（埼玉）・房州（千葉）あたりの出身者もいたし、無宿人制度が整ってから、わざわざ大坂・長崎あたりからの調達もあったという。

なお、旧佐渡鉱山会社は、現在では「株式会社ゴールドデン佐渡」と改名して佐渡金銀採掘史跡全般の管理・運営を行っている。その案内役の女性従業員I氏——彼女は電話口で自分はH氏の弟子のようなのだと自嘲気味に語っていた——からの情報によれば、こうした無宿人の「流人」は特

別の技術をもたないから、鉱山現場でのじっさいの採掘作業に従事したわけではないようだ。採掘を請け負ったのは、採掘技術者たる「金穿大工（かなほりだいぐ）」、あるいは、坑内雑役夫たる「山師（やまし）」「金子（かなこ）」のような技術者集団である。無宿人たちはその周囲で働く「水替人足（みずかえにんそく）」といった坑内湧水の汲出し作業員、あるいは、金・銀・鉛石の運搬・荷作り作業員だったらしい。H氏とI氏が言うには、こうして集められた無宿人たちも、10年ほどの年季が明け、晴れて身許引受人が定まれば、故郷まで帰れないとしても自由放免の身となり、娑婆へも出られたという（現在でもそうした無宿人の子孫を辿れるらしい）。

ちなみに、司馬の初期の『街道をゆく』にも、「佐渡のみち」と題された佐渡紀行がある（1976年10月17日～19日取材、『街道をゆく10 羽州街道、佐渡のみち（新装版）』朝日文庫、2008年、一一三～二六〇頁）。そこには、徳川家康が指名した初代の佐渡奉行（当初は「代官」）・大久保長安（1545～1613）の話、さらにそれと絡め、佐渡奉行の「留守居役」をつとめた現地の「地役人（じやくにん）」・辻藤左衛門の詳しいエピソードが綴られている。司馬の記述をまとめれば、次のようになる。大久保長安は、もともと甲斐・武田氏に仕えた金春流猿楽師の子で、大蔵藤十郎と称し、特に信玄の能役者だった。関ヶ原の合戦以前の徳川家康による甲斐・信濃平定事業を担った松平家重臣・大久保忠隣（ただちか）に見いだされ辣腕を揮う。以後、家康本人に重用され、大久保姓を賜ることになる。司馬がいうには、若き藤十郎（長安）が、甲州人の伝統で「土木（特に鉱業）」の才と「財務・会計」の才に長けていたことが、その重用の理由だろう（同書、二二九～二三七頁）、と。大久保長安となった彼は、石見銀山（1601年）、佐渡金銀山（1603年）、そして伊豆銀山（1606年）の奉行を遍歴。各所で「甲州流採鉱法」を応用した鉱山開発を実施、成功を収める。このような長安の活躍ゆえ、関ヶ原以後に生じた甲州浪人はこぞって佐渡の金銀鉱山に集まってきて、「地役人」や「山師」になったという（同書、一八三～一八四頁）。司馬が注目する辻藤左衛門という人物もまた、ま

さにこのなかの一人だった。

なお、司馬も、佐渡金山の労働者について、「遠島」「遠流」の罪人たちではなく、じっさいには「無宿人」であったと書いている（同書、二五三～二五八頁）。佐渡鉱山の繁栄で、佐渡ヶ島はいわば「金（きん）」の城下町となった。すでにこの島は「島流し」級の大罪人の配流には不適切な場所だったのである。じっさい1700年頃には、佐渡は島流しの対象から外され、八丈島や三宅島などが、より厳しい「遠流」の地となっていく。

「流人」の話の最後に、ふたたび金井宿本陣の「地下牢」の話にもどろう。この「地下牢」は、本陣跡地に児童公園を造成するとき偶然発見された。江戸中期頃のものという。現在残っている遺構を覗き込むと、薄暗がりのなか、牢のおおまかな構造を観察できる。内部は人の背丈を数十センチ超えるほどの深さに掘られた横長の長方形で、壁面は川原石がびっしりと積まれているのが分かる。正確には、深さ約2メートル、広さ約12平方メートル。北側には七段の地下への石段があり、牢の入口は左右両側に高さ1・65メートルほどの厚い石製扉がついている。天井には、松の角材のうえに栗の丸太割材を並べていたらしい。南側の石積上部には、ポストの受け口程度のちいさな小窓がある。堅牢といえば堅牢だが、本陣（＝大名の泊まる施設）の近くであって、ほんとうに佐渡への流人を入れた地下牢だったのか。

佐渡送りの人々、すなわち無宿者たちは、あくまで沿道市井の人々への「見せしめ」「さらし」の対象だった。司馬も「無宿人の道」という節（「佐渡のみち」）で次のように述べている。「……罪のない——いわばおとなしい——無宿人をえらんではつかまえ、一人ずつ唐丸籠（とうまるかご）に入れ、五十人、百人と送った」（同書、二五七頁）、と。これに関連して、金井宿の「地下牢」遺構に対する別の見解もある。渋川の地元郷土史家・大島史郎氏は、この地下施設がいわゆる佐渡送りの流人の「牢獄」であったことに疑問を呈している。もともとこの地下施設は近隣の酒店の酒蔵で、佐渡送りの「流人＝無宿人」たちはそれぞれ、唐丸駕籠に入れられたまま、役人たちの投宿先の各旅籠屋の戸外に置かれ夜を過ごしたのだ、と。もち

ろん本陣の目の前に牢屋があるのもおおいに疑問だ、とも<sup>16</sup>。

いずれにせよ、やはりあくまでも形式的な「佐渡送り」だったのだ。都市部に群がる浮浪者たちを公的労働力に変えることをねらった社会システムの一部だったということだろう。とはいえ、「島」まで宿場を渡り歩く彼らが不良ならず者であることに変わりはなく、引き連れていた役人たちも、そして街道沿いの宿場の人々も、彼らを存外丁重にあつかい、それなりのご馳走を振舞っていたというのが事実らしい。H氏いわく、「報復も怖かったでしょう」と。H氏に聞いたところでは、先にも述べたように長い「御金荷の道」の歴史で金銀の強奪はなかったが、連行中の一人の若い無宿人をその母親が強引に奪還していったという記録は残っているという。

## 7. 天台の古刹・金蔵寺と分水石——金井宿最北端の聖地

旧金井宿の本陣周辺、南北方向にまっすぐ延びる旧三国街道。かつてこの沿線に旅籠や商家が並んでいた。筆者の父方・桑島一族もこの一角を故地とした。江戸時代前期から——「織部」や「順悦」を名乗り——代々「医師」や「寺子屋師匠」を稼業としたことがわかっている。惣百姓の代表として村役人相手に訴訟を起こした記録もある<sup>17</sup>。口伝には宿場の「旅籠屋」も営んだと伝えられ、「つたや（蔦屋）」の屋号と「丸に蔦」の家紋も残る。

由緒正しい大地主ではない。しかし、過去帳・墓石などの史料から、確実に江戸前期・元禄期（初代・織部の没年は「元禄8（1695）年2月7日」の記録あり）まで、この金井の地に一族の足跡を辿ることができる。いまだ「天明の浅間山大噴火」（1783年）以前の時期である。三国街道の宿場が形成された段丘面より一段下、棚下の吾妻川流域一帯には、浅間の噴火泥流が襲うまで「金井」の集落——「下金井（あるいは元金井）」地域——が広がっていた。現在では「鎌倉街道」だったと伝えられる農道が、この下位段丘面の広々とした田地を貫いて走っている。周辺には、わずかに中世以来の石碑群や庵跡が散在しており、中世～戦

国期の「金井」郷（宿場としての「駅（うまや）」のよすがとなっている。

金井・桑島一族の菩提寺の歴史はどうか。上位段丘面にある旧三国街道（現県道35号線）は、本陣跡を中心に北に向かってゆるやかな上り坂をなしている。金井宿を登りきったあたりに、現在しだれ桜で有名な「金蔵寺（こんぞうじ）」がある。ここが桑島一族の菩提寺で、前述の医師や寺子屋師匠などを勤めた祖先たちの記録は、この寺に残る過去帳・墓石などがオリジナル史料となる。寺の位置は街道の西側（山側）、金井宿の北端で、おおきく見れば、榛名山麓の傾斜末端部に位置している。なお、この寺の庫裡北側にひろがる檀家墓苑入口には、大正～昭和初期に金島尋常高等小学校の「訓導」（＝教員）で俳人でもあった一石・石田音次郎——筆者の母方祖母の父（曾祖父）——による《月の出て見直す寺の桜（三九羅）かな》を刻む句碑（台座は浅間石）がある。筆者の母系祖先・石田一族もまた、やはりこの金井の地を故地とする。

金蔵寺は、先述の通り、正確には「登澤山照泉院・金蔵寺」と称する天台寺院で、応永8（1401）年の創建と伝えられる<sup>18</sup>。吾妻川の対岸、旧子持村の白井（しろい）城主・長尾清景が、祐道上人を招いて開山したとの伝承が残る。ちなみに、下金井にはゆかりの古い「八坂神社」（もと牛頭天王宮）が存在し、この古社もまた、清景により観応2（1351）年に創建されたものという。なお、金蔵寺は、旧渋川村の天台寺院「威徳山無量寿院・眞光寺」の末寺という位置づけとなっている。盛期には多くの堂宇が存在したが、嘉永6（1852）年の「金井の大火」で寺宝・文書記録類がほとんど焼失し、寺歴の詳細は不明なところも多い。本寺・眞光寺のほうは、白井の長尾氏が室町期以来尊崇してきた南北朝期の観海法師による開山<sup>19</sup>の名刹である。

14～15世紀に遡りうる戦国期の金蔵寺開山から、明確な履歴の刻まれた17世紀後半の元禄（または天和）期まで、金井・桑島一族は具体的にどこを生活拠点にしてきたのか。また、「天明の浅間噴火」による集落全般の泥流被災を考えたばあい、この天明年間を挟んで、一族の生活実態はい

ちじるしく変化したのか否か。これらについて現時点では不明である。しかしおそらく、江戸初期、わが桑島一族は、「棚下」下金井の鎌倉街道沿いの古来の金井郷周辺に住んでいたのであろう<sup>20</sup>。段丘面の上段と下段、金井の「棚上／棚下」における桑島一族の在所（移動）問題を考えることは、金井そのものの歴史に埋もれた「ミッシングリンク（空白期）」を考えることに他ならない。

最後に、「棚上」にある金蔵寺の立地とその聖性について触れておきたい。ここに、金蔵寺の造営場所と金井宿の水の確保との密接な関係が明快にあぶりだされるからだ。生活用水の問題は、庶民の日常生活に欠くことができない事案である。

金蔵寺のすぐ南側に、小ぶりだが迫力ある面構えの不動明王像がある。この像を筆頭に、数基の石塔が小川沿いに並んでいる。ここにあるのは、「滝不動」と「分水石」だ。不動尊が睨みを利かせるものこそ、この用水の「分水」施設だった。金井宿の街道筋をはさみ、東・西の宿裏の用水路へと水を均等分配するシステムのかなめが、まさにこの「分水石」である。「分水石」とは、石製の樋型水路に水を二手に分岐させる細長い間仕切りを設けただけの簡素なY字型装置。だが、これが画期的なのだ。宿の東西両側に分配された水は、飲用と防火用に使われた。水利問題はつねに死活問題であり、村の争議の種だった。この「分水石」のおかげで、村を二分するような「水争い」は起こらなかったという。つまり、登沢川支流・十二沢の「二本樋」から金蔵寺脇へと続くこの水場は、金井宿北端に置かれた村のライフライン（生命線）を司る聖なる場所なのだ。

## 8. 金井東裏遺跡——火砕流に被災した「甲を着た古墳人」の出土

2012年の年の瀬、渋川金井を一躍有名にする考古学的ビッグニュースが飛び込んできた。「上信自動車道（国道353号線・金井バイパス）」の建設工事中に——超音波調査で事前に何らかの遺物の存在は確認されていたが——鉄製甲を装着したままの6世紀初頭・古墳時代後期の成人男性人骨が出土したという驚嘆すべきものだった（正確

な発見期日は、2012年11月19日。以下、主に群馬県埋蔵文化財調査事業団のHP記事「甲（よろい）を着た古墳人だより」を中心とする情報に基づく<sup>21)</sup>。しかも、当時の榛名山・二ツ岳——遺跡から南西8・5キロに位置する——の噴火にともなう火砕流に巻き込まれたかのように、両膝を立て噴火する榛名山系を臨む西方向に前のめりに突っ伏した姿で見つかったのである。なお、この金井東裏遺跡のすぐ近くでは、火山噴火以前に造営された円墳2基も確認された。

その後2013年4月には、「甲を着た古墳人」（1号人骨）からわずか十数メートルほど西からは、「首飾りの古墳人」、すなわち成人女性と推定される全身骨格（3号人骨）も出ている。周囲からは生後数ヶ月の乳児の頭骨（2号人骨）と幼児の頭骨と脛骨（4号人骨）も見つかった。そのようなわけで、当初、古墳時代の「首長一家」の火砕流被災人骨が、ここでまとまって出土したと考えられたのである（ただし、彼らがじっさいの「家族」であったかどうかについては、考古学的・遺伝学的な裏付け証拠は現時点では見つかっていない）。

これら四体の人骨の出土地のすぐ北西部の発掘区画からは、鏡や豊富な鉄製品のほか、大量の土器（甕・壺・杯など600個）と玉（白玉・管玉・ガラス玉・勾玉など9000個）をとまなう祭祀遺構も発見された。なお、2013年3月には、古墳人発見場所から南へ約110メートルの場所から、多数の人の足跡（114個）や馬の蹄跡（29個）も見つかった。この痕跡によって、大人も子どもも、馬を連れ、噴火する榛名を背に火山灰上を東方向へ避難した様子を克明に知ることができる。

その後2014年4月より発掘が開始された、金井東裏遺跡から400メートルほど南——金井下之町の旧三国街道沿い東側——の「金井下新田遺跡（かないしもしんでんいせき）」では、葦や竹で編まれた——火砕流発生まで建っていた——高さ約3メートルの「網代垣（あじろがき）」の「囲い状遺構」内に約9平方メートル広さをもつ九本柱の大型堅穴住居跡まで発見された。その中央部には、5世紀後半にまで遡れる「鍛冶炉」「炭窯」など大掛かりな鉄器工房跡が残っていた（なお、この遺構は「金井三山」のひとつ吾妻山麓の「和尚坂」

に沿う「和尚沢」の沢水を引く構造で設計されている<sup>22)</sup>、という）。したがって、これら金井の二つの遺跡は、あきらかにこの金井一帯を統べた地域首長クラスの一族の拠点遺構と見てよからう。

マスコミはじめ世間は、約1500年前の古代人の生活実相の鮮烈な蘇りに、「日本のポンペイだ!」と沸き立った。東裏遺跡のあたりは、6世紀の榛名・二ツ岳の2回の噴火——1回目は6世紀初頭の「火山灰層・榛名=渋川テフラ（Hr-FA）」で約30センチ堆積、2回目は6世紀中頃の「軽石層・榛名=伊香保テフラ（Hr-FP）」で約2メートル堆積——によって、厚い火山性堆積物の堆積がある。その最初の6世紀初めの火山灰や噴火火砕流の堆積層に埋もれていたのが、まさしく金井東裏遺跡の甲人骨周辺の人々である。

この1500年前に生きた古墳人は、こうした甲（よろい）——厚さ1ミリほどの鉄板を綴った「小札甲（こざねよろい）」やその他の武具——を所持していることから、地域の有力者であった可能性はきわめて高い。ただし、疑問もある。戦闘中ではなかったのに、なぜ甲冑を身にまとっていたのか。単純に降りしきる火山灰や火山弾から身を守るためとの解釈もあるが、やはり、この武人は、この地を支配する長（おさ）として、あるいは、有力一族の父として、「荒ぶる火の神」と化した榛名の山に対峙し、断続的に続く山神の魂鎮めの儀式的最中だったという、ひじょうに興味深い解釈もある——NHKの歴史番組「歴史秘話ヒストリア——謎の古代王 最後の戦い～日本のポンペイから探る～」(2018年2月3日放映・総合)でも、この祈禱中の被災説で話を進めていた。なお、この遺跡からは、呪術用と思われる赤色染料を丸めた「赤玉」も多数（100個以上）出土している。

この遺跡は、榛名山系の北東麓の扇状台地端部にあり、金井の上位段丘崖の縁にあたる。位置関係としては、旧三国街道の金井本陣跡を東にやや進んだ場所である。この金井東裏遺跡からは、ちょうど吾妻川をはさんだ対岸（旧子持村）の扇状台地上には、元祖「日本のポンペイ」と呼ばれた「黒井峯（くろいみね）遺跡」がある。こちらは6世紀中葉の榛名大噴火時の軽石層（Hr-FP）に埋もれた大集落遺構だが、ほぼ同じ標高の台地上に遠

望される。金井東裏遺跡の場所からは、遺跡が吾妻川右岸の榛名山系の末端山裾に位置するため、噴火時の溶岩ドームである二ツ岳の姿は見えないが、榛名の山裾を縁取る標高300メートル強の端山群として、いわゆる神奈備型の「金井三山（具体的には「御袋山」から「吾妻山」までの山並み）」——発掘調査時に群馬県埋蔵文化財調査事業団が命名——は、遺跡のすぐ西方上部、太陽の沈む方向に居らぶ。

東裏遺跡はまた、榛名東麓の扇状台地の段丘崖に面している。崖下までの落差は大きく、現在時点で20メートルほどある。そしてこの崖の直下には、現在でもこんこんと榛名の清らかな伏流水が湧き出ている場所があり、格好の生活用水供給源といえよう。なお、この棚下の吾妻川沿いを北に進めば、「南牧」集落が広がり、まさにここはその入口に当たっている。

## 9. 火山信仰の風景

かつて筆者は、故郷・群馬での山々への想いを枕に、処女作『崇高の美学』（講談社選書メチエ、2008年）を書いた。その第3章「山と大地の崇高」には、「金井」のすぐ西側、榛名山麓の「伊香保（いかほ）」温泉の地名語源「イカッポネ」——「巖（いか）っばい尾根・峰」（アイヌ語「イカ・ポップ（＝山越えのたぎり立つ湯）」に由来するとの説もある）——について考察した箇所（同書、一八三頁、ならびに、二四七頁の註83）がある。筆者はそこで、国文学者・益田勝実の「火山列島の思想」（1965年）（『火山列島の思想（益田勝実の仕事2）』ちくま学芸文庫、2006年、所収）に触れながら、日本の——わけても群馬・渋川周辺の——火山風景と山岳信仰との根源的な結びつきを指摘した。すなわち、カルデラ火山の「イカッポネ」榛名東麓の扇状台地に育まれた人々の歴史・文化には、そうした山岳風土と共鳴する「感性」と「信仰」が芽生えるはずだという強い推量である。

22歳の司馬が感嘆した、関東平野の——具体的には前橋あたりからの——茫漠とした「空」の風景とは、ここでの「渋川金島のみち」の風景は異なっている。やはり司馬は、「火山の風土」をそ

の深い意味において知らないのだ。

だからこそ、1500年前のあの悲劇的な火砕流の日、古墳時代の「金井」の有力者は、武人の正装たる武具甲冑フル装備のもと、荒ぶる榛名山と対峙して「魂鎮め」の儀式をおこなっていたとの考えは、至極穏当なものと思われる（これは、「火山灰考古学」の専門家・早田勉氏の見解とも一致する）。もとより、後の金井下新田遺跡発掘でいっそう明らかになるが、同じ職能共同体に属したと考えられるこの地域の古墳人たちは、鉄器生産（製鉄・鍛冶）技術が、「火」への畏敬とそのコントロールから成り立っていることを深く知っていたと思われる。

ちなみに、少年期の筆者の原風景だった棚下の金井製鉄遺跡に南面する段丘崖上部には、「夕日観音」が祀られている。また、現在の金井南町にある渋川市立北中学校裏手の急な坂道——ここも扇状台地突端部で棚下までぐんと大地が落ち込む段丘崖——の下には、「朝日（旭）観音」が祀られている。「夕陽」も「朝日」も、地元郷土史家による地名研究文献『渋川市の地名』（渋川地名研究会・渋川市教育委員会、2001年）によれば、製鉄と関係した命名が多いという<sup>23</sup>。観音信仰など後世の仏教思想の影響・混淆もあろう。古来、製鉄技術は、ある種の宗教的秘儀と深く関わっていた。そのような歴史記憶の痕跡が、これらのちいさな観音堂にも刻まれている。

## 10. 「鉄」と「馬」を制する甲古墳人の血筋——移住と血の混交

地域の首長クラスと推定される「甲を着た古墳人」男性と、「首飾りの古墳人」女性の来歴について考えてみたい<sup>24</sup>。以下、ふたたび群馬県埋蔵文化財調査事業団の「甲（よろい）を着た古墳人だより」記事を参考に簡潔にまとめる。

まず両者の大腿骨の大きさと頭骨の形状から——つまり形質人類学的な観点（九州大学・人骨考古学の故田中良之教授・舟橋京子講師らの調査）から——おおよその相貌と年齢が明らかとなった。甲（よろい）の男性のほうは、身長およそ163センチメートルの40代前半と推定され、顔立

ちは顎の尖った面長な顔つきの「渡来的形質」の面貌（後に事業団専門調査役の 大木紳一郎さんから聞いた話では、男性の大腿骨には乗馬様の習慣痕跡があるという）。それに対して、首飾りの女性のほうは、身長およそ143センチメートルで30代前半と考えられ、鼻幅が広く顎も横にしっかり張った平たい顔つきであった。これは、古墳時代における「関東・東北系」の面構えに属している。女性のほうは、渡来的形質が薄く、日本列島に古くから住んでいた東日本の古代人氣質が色濃い女性だと考えられるのだ<sup>25</sup>。

さらに二人の来歴は、歯に残されたエナメル質のストロンチウム同位体分析で、いっそう明らかになる。歯に蓄積されたストロンチウムというのは、その持ち主が幼少期（10才くらいまで）を過ごした場所の基盤地質の成分比を反映しており、出身地の特定に役立つ。分析の結果、男性も女性も、地元・渋川金島周辺の成分比特質を示さなかった。二人とも、隣県の長野・伊那谷（いなだに）地方（現飯田市）の成分比特質に酷似するという。彼らの「子どもたち」と推測された幼児と乳児の特質は、同じエナメル質の分析から、金井周辺の生まれと特定された。ちなみに幼児は、歯の生え変わる年頃で、5～8歳くらいだ、とも。

さて古墳人の男女の生育地と推定された「伊那谷」とは、どんな人文の土地だったのか。そこは、まさに古代の「馬」の一大産地だった。馬の飼育と生贄埋葬の遺構も数多く残っている。馬の飼育の痕跡は、早くも4世紀からある。そのような土地に育った朝鮮半島由来の「馬」と「鉄」という高度技術をもつ者が、はるか長野の南部から、おそらく同系の人々の住む村々の牧地を経由しつつ、ある程度の大きさをもつ集団でやってきて、ここに「金井」に拠点を設けたということだ。「甲を着た古墳人」が「馬」や「鉄」とかかわりの深い渡来系であったことは、歯の科学的成分分析からだけでなく、考古学的見地からも明らかとなっている。住居敷地外に多数の馬の蹄跡が発見されたこと、「剣菱形杏葉・けんびしがたぎょうよう」という豪華な馬具装飾品も発掘されたこと、特にこの二つからだ。そして、古墳人の甲冑スタイルの装飾品に、半島風の「提砥（さげと）と刀子（と

うす）」の組合せが認められること、などからも傍証されている（さらに最近では、甲人骨と同時に発見されたもうひとつの甲冑が、朝鮮半島でしか類例が発見されていない「鹿角製小札（こざね）」使用の稀少かつ精巧な製品だとの調査結果も出ている）。

なお、以下すこしく、「渋川」「金島」周辺の「牧」<sup>26</sup>についても、この「甲を着た古墳人」との関係で考えておきたい。時代はずいぶん下るが、平安中期の法令施行細則集『延喜式』（927年成立）に載る天皇直轄の牧場「上野国九牧（群馬にある9つの御牧）」のひとつ、その筆頭に挙げられるのが「利刈（とがり）牧」である。筆者はここで、「金井」の北端、「川島」の境界にあたる「南牧」、および、吾妻川を隔てた旧子持側の「北牧」、これら南北の「牧」付近一帯——三国街道の空ヶ橋の関所をはさむ両側の地区——が、その「利刈牧」の主要部であったと強く主張しておきたい。この筆者の見解は、郷土史家・大島史郎氏がその著『ふるさと渋川史帖』（文芸社、2015年）——じつは江戸期の歴史を中心に綴った書——のなかで、あえて巻末に「利刈郷と利刈牧」の節を設け、渋川地区南部の「有馬牧／有馬島牧」と区別される、吾妻川流域の「川島」・「南牧」・「金井」・「阿久津」（ならびに対岸の「北牧」）一帯で展開された大規模な御牧——「利刈牧」と比定されるもの——の存在を強調したことと一致するものだ（ちなみに、大島氏によれば、じつは川島に鎮座する上野国四ノ宮「甲波宿禰神社」もまた、元来この地域の馬匹文化と製鉄文化の守護神として祀られたものだった、とも）<sup>27</sup>。

古墳時代以前、この一帯はいまだ「カナイ（金井／金鑄）」とは呼ばれていなかった。渡来の製鉄文化の流入から律令国家成立を経て、平安・鎌倉期には当地は「金／鉄（カネ）」と深く結びつくことになったのだろう（「金島」名はもっと新しい<sup>28</sup>）。ここは、本稿のはじめに述べたように、関東平野が終わって火山の河岸段丘が織りなす峡谷地帯がはじまるインターフェイスの地。そこに展開する扇状台地上の日当たり良き草地は、製鉄拠点からも至近で——整備された現代の牧場のようなものではないが——便利な駿馬の生産拠点と

もなったはずだ。広大な平野末端部に位置し、幾多の製鉄関連工房を構える「ハイテック・タウン」の辺縁地帯に広がる沃野こそ本来の「利刈牧」であり、古墳時代以降の製鉄産業の勃興を機に、その後もますます製鉄文化の展開が加速され、「金井（もとは「金鑄」）」と呼ばれる郷／村に発展したのだろう。なお、対岸の旧子持村には「吹屋」などの地名も残る。この地域では、近代には鑄物の生産も盛んだった。

想像してみよう。伊那谷に生まれた渡来系の高度技術をもつ男（甲古墳人）は、同郷生まれの在地豪族の娘（首飾古墳人）——女性はこの推定では10歳ほど若い——を娶り、在地の者たちとも関係を深くした。この夫婦は、さらに新天地の開拓に向かう。あるいは、同系集団のボスの命を受け、ネットワークづくりのため、新拠点の開発に向かったのかもしれない。一族と多くの馬を連れ、半島由来のタタラ製鉄技術を携えて東の上毛野の地を目指す。後に「金井」と呼ばれることになる榛名東麓の扇状台地は、水も清く、「製鉄」にも「牧」にも好立地で、そこで子どもを儲け、生活拠点を構えた。ここで小規模な鍛冶工房（下新田遺跡）を運営し、やがて砂鉄製鉄もおこなうようになる（なお、後の時代の「金井製鉄遺跡」<sup>29</sup>などで見られるやや大規模なタタラ製鉄は、6世紀中葉のHr-FP軽石層に多く含まれた鉄成分が主たる供給源だと考えられている）。そしてこの地域の産業振興に貢献する「王」となったのだろう。なお、彼の身につけていた甲は、地元の砂鉄採取によるタタラ製鉄（ならびに簡素な鍛冶技術）から作られたものではない。明らかに先進渡来文化を享受していた畿内——おそらく奈良あたり——で製造されたものと推測されている。渡来系の人々を擁する大和王権と強固なつながりをもつ毛野国の大王が、支配地域の地方王たちに、こうした高度なハイテク製品を配っていたと想像される。

ただし、この渡来系文化を体現する「金井王」は、おそらく畿内から長野・群馬への一族の移住史のなかで、朝鮮半島由来の風景と習俗とは異なる別の精神風土——火山麓に展開する、ある種の古日本的な人文（じんもん）——とも深く触れあっていたのであろう。これを象徴するのが、東日本に

色濃い古来の遺伝形質をもつ「妻」——現実には配偶者だったか否かは実証しがたいが——との出会いである。女性の担う文化気質として継承された「火山崇敬」「火山畏怖」の古来の呪術的感性は、半島渡来の知識と技術のうちに融けこみ混じり合ったとはいえないか。

甲古墳人男性の「金井王」は、山の神の怒りの業火に、火を操る文明人ないしは知と技を備えた人間として、高度テクノロジーの精華たる鉄製武具を身に纏い、毅然と対峙するほかなかった。しかしいっぽうで、首飾り古墳人女性に体現されるよう、火山大地に生きる者の裡に息づく古来の感性をもってすれば、それは神への「祈り」や「祀り」によってしか鎮護できない天地自然の魔力でもあった。

1500年前、最期の日を迎えた「金井王」の心には、このように、朝鮮半島由来の「大陸の感性」と日本（特に東国）由来の「火山列島の感性」が交錯し、渦巻いていたのではないか。1500年後に蘇った彼ら金井の古墳人たちが教えてくれるのは、そんな「技術」と「感性」の文化交流の痕跡であり、土地と人間の融けあう歴史のダイナミズムの実相である。

## 11. 「馬」の往還——西国と東国、朝鮮と日本をむすぶ信州・伊那谷

榛名の火砕流に甲を着て果てた男の来歴をもう少し考えてみたい。彼らは、馬の輸送ないし放牧のため、故地・長野と新天地・群馬とのあいだを、何度も行き来していたのかもしれない。

ここで筆者は、父の昔語り（よく聞けば、父の母である祖母の昔語り）を思いだす。明治生まれの父方祖父・桑島菊一——筆者の生まれる数年前にすでに他界——にまつわるエピソードだ。この祖父は、旧金島村助役・傳一郎の一人息子であったが、義務教育以外は受けず、父親に請うて幾許かの土地を購入し、「百姓」すなわち一介の農業従事者となった。そんな菊一は、大正10年代（1920年代前半）頃、金井から牛を引き連れ、徒歩で伊香保から榛名の山路を越え、榛名西麓の旧倉渕村（現高崎市）を経て、浅間山近郊のどこかの牧地

まで通っていたらしい。おそらく季節放牧にかかわっていた「孀恋のアサちゃん」に牛を託す習いがあったため、と思われる（このアサちゃんも、時に行商かなにかで金井の菊一宅に立ち寄ったようだ）。

このエピソードは「牛」の話である。が、「馬」でも同じであろう。なお、当時大正期の金井では、馬を飼う農家は2、3軒しかなかったということだ。近代陸軍ができ、馬は供出の対象だったことも馬が少ない理由かもしれない。いずれにせよ、古来、牛馬を駆って移動する牧人は、軽いフットワークと密なネットワーク、その両者を有していたと思われる。よき草地を求め、かなりの距離を移動する癖は、甲古墳人の時代から菊一の時代まで、それほどの隔たりはないのではないか。

「甲を着た古墳人」の男性が、生まれ故郷の「伊那谷」を発し、その後どのようなルートを進んで「金井」まで至ったのか、それは知る由もない。だが、彼がこの金井の「地の利」を見抜き、ここに生活拠点にしたことは確かである。ここには、簡易な鍛冶・製鉄のための「砂鉄」と「山林」、清く豊かな「伏流水」、そして馬匹生産に適した「牧草地」があった。すべて火山たる榛名山とその扇状台地、それを刻む吾妻川の河岸段丘がもたらした恵みといってよい。

8世紀前半、律令体制による国づくりが進むと、畿内と東国をむすぶ主要官道たる「東山道（とうざんどう／とうせんどう）」の「駅家（えきや）」が整備される。長野・信濃国の「伊那谷」も、まさにこの大幹線道路が通っている。西国（特に畿内）と東国とをむすぶ古くて重要な文化交流ルートだったわけだ。

ちなみに、東山道は、近江国、美濃国、飛騨国を経て、信濃国南部に入り、途中「伊那谷」を経由しつつ信濃国北部へとまっすぐに進む。諏訪湖西側を「塩尻（しおじり）」・「安曇野（あづみの）」と通り、東方向に直角に折れ、浅間山西麓の「上田（うへだ）」に達する。そこから浅間山をぐるり南麓へとまわり込み、「佐久平（さくだい）」の盆地に達し、さらに「小諸（こもろ）」から浅間東麓の「追分（おいわけ）」・「軽井沢（かるいざわ）」へと至る。このあたりからは、江戸期の

「中山道（なかせんどう）」とも重なっている。碓氷（うすい）峠を越え、群馬・上野国に入り、「坂本」・「横川（よこかわ）」・「松井田（まついだ）」・「安中（あんなか）」・「高崎」と続いていく。ちなみに、江戸期の中山道は、「塩尻」・「下諏訪」と進んだ後、浅間山麓直下の「上田」・「小諸」は通らず、もうすこし南側のルートを「望月（もちづき）」・「八幡」・「塩名田（しおなだ）」・「岩村田（いわむらだ）」・「小田井（おたい）」と通過し、その後「追分」・「軽井沢」に至るものだった。

なお、後で詳しく触れるが、司馬には、「佐久平みち」（1976年7月25日～27日取材、『街道をゆく9 信州佐久平みち、潟のみちほか』朝日文庫、1979年、二四五～三一七頁、所収）という『街道をゆく』シリーズがある。その紀行後半のエピソードに次のような話がある。南軽井沢で拾ったタクシー・ドライバーが、地元の信濃（長野）人でなく、上州（群馬）人だったというのだ。これに関して、司馬は、以下のような考察をおこなっている。

「なるほど軽井沢なら当然ながらタクシーの注文が多いが、考えようによっては、木曾義仲から戦国の真田氏にいたるまで、信州の勢力は上州の一角をかならず植民地のように従えている。上信のあいだに人間の往来が伝統的に多かったから、上州人が夏場の稼ぎ場を信州にもとめるというのは、自然な動きなのかとも思えた。」（同書、三一二頁）

司馬による軽井沢のタクシー・ドライバーにかんする考察から、また、筆者の祖父・菊一による浅間山麓での季節放牧のエピソードから、「伝統的に」この上毛野国と信濃国とのあいだの交通は、きわめて頻繁で、歴史が古いことがわかる——なお、「あっちからもこっちへ、こっちからもあっちへ」の往来があるというのは、「韓のくに紀行」においても半島（朝鮮）と島国（日本／倭）のあいだで説かれた、司馬一流の文明・文化の交流における双方向性の重視と一致していよう（本稿冒頭に挙げた筆者による『文芸学研究』第22号、2019年3月掲載の論考を参照）。

伊那谷と金井をつなぐポイントは、「馬」である。



さしずめ、現代版の伝馬たる「タクシー」も、まさしくこれに含まれようか。

## 12. 5世紀の東国における馬匹文化——朝鮮半島動乱の予感

古墳時代の馬匹文化に精通する考古学者・国立歴史民俗博物館教授の白石太一郎は、その『考古学からみた倭国』（青木書店、2009年）のなかで、この時期に馬の集団飼育の必要性が生じた理由を、国家体制の確立との関係から説いている。

朝鮮半島における高句麗南侵の脅威を身近に感じていた百済系の人々は、倭国でも、軍事・輸送・農業などの面から、自給的な馬の量産を急いだ。各地の「牧」の管理・運営を担ったのは、まさに百済系の渡来人であった、と。だから、平安期の法令施行細則集『延喜式』巻48（10世紀前半成立）に登場する「御牧」——天皇直轄の官営牧場——の起源は、この5世紀の古墳時代における国際的な政治状況に求められるのではないかと。も。「御牧」の設営は東国で盛んであり、じつに甲斐・武蔵・信濃・上野の4つの国に集中する。信濃国（長野）は16ヶ所、上野国（群馬）は9ヶ所——「上野国九牧」——を数えていた。「渋川金島のみち」にも、古来、信濃の駿馬の頻繁な往来があったのは当然と思われる。

白石の研究で興味深いのは、千葉・佐倉における古墳（たとえば大作31号墳の1号土坑）での「犠牲馬土坑」——被葬者の埋葬時に埴輪ではなく装飾生馬も同時に埋葬した穴——のエピソードである。東国では、大王クラスの被葬者を埋葬する最大規模の前方後円墳ではなく、専門技術者集団の統括者クラスが葬られたやや小ぶりの円墳があり、そのような古墳にこうした犠牲馬埋葬の事例が多い、というのである。

白石の推測が正しいとすれば、朝鮮半島の騎馬民族たる高句麗に対抗するには、倭国でも馬を飼育・生産し、さらに高度な技術で作られた鉄製武具を生産する必要があった。それには、「馬」と「鉄」にかんする知識と技術をもった者たちの存在が前提となる。つまり、百済系渡来人の集団的な入植・移民、ならびに、その知識と技術の各地への伝播

が必要であったろう。

ここまでくれば、「金井王」の人物像は、かなり明らかになってくるのではないか。彼は地域の首長すなわち「王」であったろう。しかし、上毛野地域全体を統べる「大王」は、ひらけた関東平野に居た（たとえば榛名南東麓の現高崎市に存する「保渡田古墳群」における前方後円墳被葬者たちを「盟主的リーダー」としたネットワークが想定される<sup>30)</sup>）。現に、渋川・金島地区にはやや小規模な円墳が多い（たとえば、金井東裏遺跡周辺のいくつかの円墳など）。

## 13. 信州馬と坂東武者——司馬の説く「望月の馬」と木曾義仲

この古代の官道と近世の街道が南北に通じた「佐久平」の盆地こそ、「馬」に注目する司馬が『街道をゆく』シリーズで採りあげた場所だった。司馬の「信州佐久平みち」の語りは、千曲川沿いの盆地・佐久平の「望月の馬」の話に収斂していく。この「望月」には、平安期の『延喜式』に載る「信濃一六牧」のひとつ、「望月牧」が存在した。この朝廷の管理する牧場は、当代随一を誇る官馬の供給地だったという。

司馬（同書、三〇八～三〇九頁）も引くよう、かの地は清少納言『枕草子』のなかで、「駅（むまや）は、梨原〔筆者註記 近江〕。望月の駅（むまや）。……」と挙名され、「あはれなる」駅家の代名詞となっていたと想像される。平安期においてすでに「望月」には駅家が置かれ、東山道の脇街道をなしていたのだろう。より古い時代——たとえば渡来人のやってきた古墳時代——にはすでに、列島の西と東をつなぐ中継地であったことは想像に難くない。

そうして司馬は、この古来の「馬」の一大産地と坂東武者の誕生とを絡め、ドラマチックに語ってみせる。この望月の地こそ、まさに源氏傍流の武士——西国ではきわめて野卑な人物と伝承される——源頼朝のいとこ・木曾義仲の挙兵の地だったからだ。司馬はここで思いきり、歴史＝文学的想像力をはたかせる。手勢わずかな義仲は、「馬の産地さえ制すれば」平家の軍勢を必ず騎兵戦で

攻め落とせると思ったのではないかと。結果は、義仲の思惑通りとなった。そして、千曲川兩岸の広大な「御牧」の管理人——滋野（しげの）氏一党——の親類縁者は源氏方につく。彼らはやがて雄々しく馬を駆る「坂東武者」に成長していったのだ、と。このような想像のもと、司馬は、「佐久平みち」の冒頭部分（同書、二五三～二五四頁）において、『平家物語』（巻6）の一節「信濃一国の兵（つは）もの共、なびかぬ草木もなかりけり」は、まさにこうした背景を鮮やかに語った一文ではないか、というのである。

「私は、信州について知るところがない」と明言する西国育ちの司馬は、「……まことにそうで、信州は鎌倉以来、上方圏（かみがたけん）に属せず、関東圏に属し、交通網もそのようになっている。鎌倉幕府ができると鎌倉へできるだけ早く到着できるように信州の各地で多くの『鎌倉往還』が開鑿（かいさく）された」（同書、二四八頁）と述べる。これはまさに、本稿のはじめに、22歳の司馬が終戦を迎えた地、下野国・佐野をめぐるエピソードで言及した謡曲『鉢木』の「いざ鎌倉」の話とも呼応するものだ。

なお、司馬は、望月の町の景観を「……地形は意外に錯綜（さくそう）していて、馬を放牧させられるような地形とも思えない」（同書、三一七頁）という。司馬は取材時には未見だったようだが、望月町北東部に存在する「御牧ヶ原」という場所がほんとうに古代牧の場所だろうか、と疑義を呈している。歴史的にみて、御牧がその牧の名を冠した場所にあったか否かは判断が難しいだろう。しかし、司馬の示唆を重くみれば、望月中心部に管理人は住んでいて、牧地そのものは、すこし離れた場所に、広範囲にわたって点在していたのかもしれない。そう考えると、くだんの渋川に比定される「上野九牧」のひとつ「利刈牧」の場所も、やはり中央からすこし離れた——やや広範囲にわたる金島地区一帯の——好立地の草地に点在していたとしても何ら不思議ではあるまい。

## むすびにかえて——火山・鉄・りんご、あるいは紅色の夕空風景

《群馬・渋川金島のみち》の歴史風景論をまとめたい。

われわれは、奇しくも、『街道をゆく』シリーズのなかの司馬の断片的記述にサンドイッチされるかたちで、彼の「鉄」と「馬」への関心あるいは坂東武者への興味を参照しながら、《渋川金島のみち》の古層へと沈潜（しんせん）していった。キーワードは、本稿タイトルにもある「火山」・「河岸段丘」・「製鉄」である。

群馬県の中央部に位置する「渋川」・「金島」地区は、自然地理からいえば、関東平野の末端部、平野と山岳のインターフェイスに位置し、榛名山系の火山性扇状台地が、幾重にも河岸段丘をなす場所だった。そこに、列島の西と東の文化の交差、さらにいえば、朝鮮半島と日本のあいだの文化交流の結節点が存在したのである。この土地を特徴づけるものは、まず5世紀に半島渡来系の人々より伝えられた「鉄」と「馬」の生産に象徴される高度な文明テクノロジーである。むろん、地勢的には、「火山」に育まれた豊かな水と緑が、これらの技術集団を支える資源だった。いっぽうで、その火山が自然の猛威をふるったとき、彼らが頼るものは、この列強固有の山の神々に対する信仰であった。おそらくこの東国の地には古層に埋もれた山への畏敬的感性もまた残存している。

江戸期の浅間山大噴火の記憶、三国街道の宿場の記憶、また、戦国・鎌倉期の坂東武者たちの記憶が折り重なる。さらにその下層には、平安時代から古墳時代まで遡れる厚い人文の歴史が眠っている。さらに、そのまた地中深くには、はるか弥生・縄文の古層にまで達する人文の痕跡も埋もれている。いわば、そんな重層的な歴史風景の一断面が、金井東裏遺跡からの「甲を着た古墳人」の発見で露わになったわけだ。

「金島」の歴史と地理を辿っただけでも、その人文的記憶は、司馬が驚嘆した「空」だけの関東平野が生んだものとは大いに異なるものだった。この《群馬・渋川金島のみち》紀行が、司馬の書かなかった歴史風景の面貌を少しでも描き出せて

いるなら、これにまさる歓びはない。

群馬近県では、長野のりんごがブランド化されている。が、しかし、榛名山の南東から北東麓の斜面でも、美味しいりんごやぶとうの果樹園が点在する。これも、古墳時代、6世紀中頃の――吾妻川左岸の旧子持村の「黒井峯遺跡」の集落を襲った――二ツ岳の2回目の大噴火による厚さ数メートルの軽石層（Hr-FP）がもたらした一種の恩恵といえる。水捌けが良く、陽あたりも良好な扇状台地の山麓斜面は、米作りには厳しい環境の麓の村々に、換金制作物の導入を促した。

金井の古刹・金蔵寺西側の榛名に続く道、登沢川の穿つ谷間の細道を伊香保方面に登っていくと、何軒かの家族経営の小さなりんご農家が並んでいる。5月の連休あたり、新緑のなか、この沢に沿って蛇行する山道をゆるゆると登りと、榛名の外輪山である水沢山と二ツ岳が青々とした山塊となって眼前に迫ってこよう。こんなとき、ふと窓の外を眺めれば、初夏の陽に輝く果樹園のなか、葉と幹をふちどった白い花の群れを見つけ、その可憐さにはっとさせられるかもしれない。

俳人で教員だった――あの金蔵寺墓地の句碑の――曾祖父・石田音次郎の末息子（母方祖母の兄）は、その父を継ぎやはり教員であった。しかし、病で両足を失い、道半ばで教職を断念することになる（すでに兄二人も若くして亡くなっていた）。だが、自ら一筋に生きる道を、まさに切り開く。彼は、この軽石ばかりの金井西部にひろがる榛名東麓の「開墾原野」の地理・地質を熟考したうえで、換金作物としてりんごの植樹・栽培を力強く促進したのだった。

外皮に達するほど黄金色の蜜で満たされた、あのずっしりと実の詰まった「ふじ」りんご。このりんごの野趣に富む紅さこそ、榛名に沈む夕陽の色と重なって、なかなか忘じがたい。すでにこの思い出の「石田りんご園」はしずかに幕を閉じている。果樹園の地下に厚く堆積していた軽石も閉園と同時に根こそぎ掘り起こされ、軽石関連業者に売られたと聞く。

筆者としては、原風景たる《群馬・渋川金島のみち》の歴史語りの最後に、「火山」と「鉄」をめぐる榛名山と吾妻川の歴史、それを縁取る「り

んご」のごとく紅色に染まった夕空風景をくわえないまま、本稿を閉じることはできない。

## 註記

- <sup>1</sup> 桑島秀樹「司馬遼太郎〈湖西のみち〉・〈韓のくに紀行〉をその感性哲学から読む―初期『街道をゆく』が描く〈日本人の祖形〉と朝鮮憧憬―」、文芸学研究会編『文芸学研究』第22号、2019年3月、五六～八一頁。
- <sup>2</sup> 「眼の思考」とは、松本健一×石川好「(対談) 物語る記憶と気概」で、松本が司馬の思考法を端的にしめすものとして語った言葉。『司馬遼太郎―幕末～近代の歴史観』（別冊文藝）、河出書房新社、2001年、二〇六～二〇九頁。当時新進のノンフィクション作家であった石川（1983年の『カリフォルニア・ストーリー』でデビュー）は、色鉛筆で「絵のように」カラフルな司馬原稿を見たときのインパクトを次のように回想する。「司馬さんて、造形的にイメージし、本質はパッと分かっちゃって、そこからあとは彼が知っている知識をかぶせる。そしてフィールドワークで得た風景を葉っぱにし、幹を描くというふうにやってた人だな、という印象を持ってた。……」（同書、二〇七頁）。
- <sup>3</sup> 作家・井上ひさしは、司馬が『殉死』を執筆中、東京・神田の古本屋街から乃木大将の史料が消えたというエピソードを伝えている。同時期に乃木にかんする戯曲を書く準備中に古書店主から聞いたという。井上ひさし「司馬学校を夢見て」、司馬遼太郎記念財団編『司馬遼太郎』（司馬遼太郎記念館カタログ）、2015年、一二頁。
- <sup>4</sup> 「歴史学者から見れば、歴史とは『記録』だとなる。でも司馬さんは記録を書こうと思ったんじゃない。『記憶』を書こうと思った。自分が書いてるのは坂本竜馬の歴史記録ではない。坂本竜馬にまつわる『記憶』なんだと。みんながそう思えるかもしれない『記憶』というものを彼は書こうとしたと思うね。……」。前述の「(対談) 物語る記憶と気概」での石川の発言（前掲書、2001年、二〇九頁）。
- <sup>5</sup> 『ガイド 街道をゆく 近畿編』所収の1983年7月のエッセイ。この引用箇所直前には、人間の本質を見究めるには「書斎での思索だけではどうにも

- ならない」「山川草木のなかに分け入って、ともかくも立って見ねばならない」との前置きがある。司馬遼太郎『司馬遼太郎が考えたこと 12 エッセイ 1983.6~1985.1』新潮文庫、2005年、一〇二〜一〇三頁。
- <sup>6</sup> NHK戦後史証言プロジェクト番組「日本人は何をめざしてきたのか」シリーズ第4回、『二十二歳の自分への手紙〜司馬遼太郎〜』（2014年7月26日放映、90分）、「NHK戦争証言アーカイブス」に映像収録。
- <sup>7</sup> 「私の関東地図」（1979年12月初出）、『司馬遼太郎が考えたこと10—エッセイ1979.4〜1981.6』新潮文庫、2005年、一一五〜一三二頁、所収。なお、本稿では、司馬執筆テキストの直接引用箇所は、使用したテキストに基づき、振り仮名あるいは傍点のある場合には、それを当該文字すぐ後の丸括弧内に付記した。また、テキストの参照頁数は、すべて漢数字で表記した。
- <sup>8</sup> 『街道をゆく』にも数種の東北紀行はある。赤坂憲雄『司馬遼太郎 東北をゆく』人文書院、2015年、を参照。なお、民俗学者・赤坂は、炯眼にも、司馬の東国観における狩猟的世界（＝縄文期以来の古層文化）の欠落を指摘する。
- <sup>9</sup> 「『宮本学』と私（『宮本常一—同時代の証言』）」（1981年5月初出）の冒頭部分での記述。『司馬遼太郎が考えたこと10—エッセイ1979.4〜1981.6』新潮文庫、2005年、四〇九〜四一三頁、所収。なお、このエッセイの最後で、司馬は次のように語る。「人の世には、まず住民がいた。つまり生産を中心とした人間の暮らしが最初にあって、さまざまな形態の国家はあとからきた。忍び足で、あるいは軍鼓とともにやってきた。国家の興亡があったが、住民の暮らしのしん（傍点）は変らなかった。そのしん（傍点）こそ『日本』というものであったろう。そのレベルの『日本』だけが、世界中のどの一角にいるひとびとも、じかに心を結びうるものであった。／そのしん（傍点）が半ばほろび、あたらしいしん（傍点）がまだ芽ばえぬままに、日本社会という人間の棲（す）む箱は、こんにち混乱をつづけている。しん（傍点）は半ば亡（ほろ）んだが、しかし宮本学は私どもに遺（のこ）された。それだけでも望外な幸運として、私どもはよろこばね

- ばならない。」（同書、四一三頁）、と。ちなみに、『あらくみるきく』（日本観光文化研究所）は、1967年（〜88年）に宮本が創刊した雑誌。なお、筆者による宮本にかんする短稿は、桑島秀樹「〈美学〉と交差する手法」（『宮本常一『忘れられた日本人』発表50年』特集・寄稿記事）、『中国新聞』（朝刊）、第24面（解説・総合面）、2009年9月6日。
- <sup>10</sup> ジンメルの風景分析については、桑島秀樹「G・ジンメルの山岳美学にみる新たな崇高論の可能性—造形芸術との比較から—」、広島芸術学会編『芸術研究』第16号、2003年、二九—四三頁（抄版は、同『崇高の美学』講談社選書メチエ、2008年、第3章）。
- <sup>11</sup> ここで説く「渋川」・「金島」の地勢描写の初出は、桑島秀樹「美学者、野を歩く」（全8回）、『中国新聞』朝刊、文化面「緑地帯」コーナー、2010年9月8日〜17日、で綴った連載エッセイのうちにある（特に、第4回の9月11日、第17面）。この連載では「風景を読む」原点と実践例について簡便に書いた。
- <sup>12</sup> 金島各集落のうち、「天明の浅間噴火」の泥流被害は、「川島」が最も甚大だった。近藤義雄、大島史郎『北群馬 渋川史帖』みやま文庫154、1999年、「6 渋川市川島天明三年浅間山泥押し」・「川島村の再建」（四一〜八二頁）、を参照。なお、泥流の襲った地域は、以下の文献掲載の地図がわかりやすい。関俊明『浅間山大噴火の爪痕・天明三年浅間災害遺跡』（シリーズ「遺跡を学ぶ」075）、新泉社、2010年、二〇〜二一頁（図11）。
- <sup>13</sup> たとえば、平成の大合併後の新渋川市の広報誌、しぶかわ環境フォーラム編『しぶかわ—新渋川市の魅力—』2007年3月、四頁、を参照。
- <sup>14</sup> 渋川の郷土史家・大島史郎氏は、群馬県下でも珍しく、「馬市」が渋川で開催されることを、古代以来の馬匹生産の文化伝統の継承と捉える（2019年7月26日の筆者によるインタビューに基づく）。大島氏によれば、上野国唯一の馬市は、室町初期（応永年間）以来の開催という。前掲の『北群馬 渋川史帖』、「8 渋川の馬市」・「9 渋川馬市の立地と六斎市」（八三〜一三四頁）、を参照。
- <sup>15</sup> 浜野浩「佐渡の歴史に現れた被差別民」、沖浦和光編『佐渡の風土と被差別民—歴史・芸能・信仰・金銀山を辿る—』現代書館、2007年、一六四〜二四〇頁。

- <sup>16</sup> 2019年7月26日の大島史郎氏へのインタビューに基づく。大島氏は、たしかに地元罪人の一時的な牢獄に使われたことはあっただろう、と付言している。ちなみに、渋川市史誌編さん委員編（近藤義雄ほか監修）、ムロタニ・ツネ象画『まんが 渋川の歴史』渋川市、1994年、一〇八～一〇九頁、には、史料に基づき、佐渡送りの「流人」の様子——唐丸駕籠に入れられた姿——を描いたマンガ挿絵が載っている。
- <sup>17</sup> 筆者の祖・渋川金井の「桑（楽）島」一族については、『群馬県姓氏家系大辞典』角川書店、1994年、四四七頁、を参照（「堀口佳男家文書」に、元禄以前の1680年代前半の天和年間における「金井」在住可能性の示唆もある）。なお、前掲の『まんが 渋川の歴史』、同箇所（一〇八頁）には、1846（弘化3）年の越後大名（村松藩）・堀氏一行の金井宿宿泊記録に基づき、本陣（34人投宿）ならびに幾つかの旅籠名とその宿泊者数一覧が載る。そして、ここに「数右衛門」（9名宿泊予定で実際には5名宿泊）の名があり、大島氏によれば、旅籠屋「葛屋」伝承のある桑島家の先祖記録とも一致するという。江戸後期の桑島一族は、三国街道筋で医業や寺子屋師匠業のみならず、旅籠屋業にも携わっていたようだ。ただし、大島氏によれば、直後の嘉永6（1852）年の「金井の大火」で被害を被った可能性が高い、とも。
- <sup>18</sup> 金蔵寺北側の檀家墓地入口には、基礎部に「源義秀聖霊」「康永2（1343）年」と刻まれた宝篋印塔が存在することから、祐道上人開山以前の古層も想像される。なお、「義秀」とは、当時の赤城・宮田付近まで勢力を誇った里見義秀と推定されている（かつてこの刻字を徳川一族の祖「新田義貞の四男・義季（世良田義季）」と解する説があり、1680年代に江戸幕府も調査している。しかし、その後の幕府の対応から鑑みてこの説は信憑性が低いようだ）。里見家といえ、『南総里見八犬伝』のモデルで、清和源氏・新田氏流の戦国武将の一族。当時、群馬各所に勢力圏をもっていた。
- <sup>19</sup> 従来、開祖は「平安期の慈覚大師・円仁」とされてきたが、ここでは、大島氏による最新の「眞光寺」研究にしたがい、南北朝期の観海法師の開山とした。大島史郎『続 ふるさと渋川史帖—眞光寺の歴

史と文化財を中心に』2019年4月（私家版）、を参照。

- <sup>20</sup> 地元郷土史家たちの手になる地名由来集成、渋川地名研究会・渋川市教育委員会編『渋川市の地名』、2001年、五三～五四、五七頁、を参照。下金井の鎌倉街道沿い「天王平」付近には鎌倉期の薬師堂や南北朝期の宝篋印塔などがあったようだ。いずれも1620～40年代の寛永年間に、上位段丘面に建立された金蔵寺地内に移設されたという。
- <sup>21</sup> 2019年春に、金井東裏遺跡をめぐる最新の総合的調査報告（特に古墳期に焦点）として、『金井東裏遺跡《古墳時代編》（第652集・「(国) 353号金井バイパス（上信自動車道）道路改築事情（国道・連携）」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書）』群馬県渋川土木事務所・公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、2019年、が出版された。これは、「本文編1」・「本文編2」・「写真図版編」・「観察表編」・「理学分析・考察編」の4冊子と関連地図からなる圧巻なもので、今後の学術的検討の基礎資料となろう。簡易普及本として、同埋蔵文化財調査事業団編『古墳人、現る—金井東裏遺跡の奇跡—』上毛新聞社、2019年、も同時刊行されている。
- <sup>22</sup> 前掲の『古墳人、現る』、一四二頁、を参照。同書には、「和尚沢」の水源を見守る場所に「金井古墳」が存在することにも言及がある。「和尚坂」「和尚沢」とその端山麓一帯は父方実家に面するため、筆者にも一家言ある。1) 和尚沢の水は清く、上越新幹線地下トンネル掘削まではひじょうに豊富だった。周辺には沢水を引く池をもつ家もある。2) 和尚坂は里山に通う古い生活道で、父方叔父によれば、沢沿いには「鉄滓」が認められる場所もある。3) 1950年代後半頃、父方実家敷地内（県道西側の現在の発掘区画よりやや北）で、自家用地下式サイロ設置の際、「炉」「甕」などが軽石層（Hr-FP）の下から多数出土した（当時、渋川市立金島中学校に寄贈）。ちなみに、登沢川支流・十二沢「二本樋」の北西台地「棒頭（ぼうがしら）／古名・ぼう平」周辺にも鉄滓が残る場所がある（前述の『渋川市の地名』、六四頁）。このような次第で、今後さらなる「金井」周辺の製鉄・鍛冶関連遺構の学術調査が期待されよう。
- <sup>23</sup> 「夕日」は、製鉄炉から流れる溶鉄を「湯」と呼ぶため、「夕日＝湯火」と解することができる。夕日

観音は、金井の「発京(ほっきょう)／「北境」の意？」にある。いっぽう、「朝日(旭) 観音」は、金井の「鳥頭平(とつとうだいら)」にあるが、もともと吾妻川原の「齒黒(はぐろ)」——砂鉄採取地と比定される——にあった「齒黒(羽黒) 稲荷」を、洪水後にこの地に移設したらしい(天明2年には再建)。「鳥頭」地名は、ここが榛名の扇状台地の丘陵部が東方に延びた先端部(＝突頭)から、という。以上、『渋川市の地名』、五八～五九頁、を参照。なお、同書(「大字『金井』のいわれ」、五三頁)によると、「金井」地名そのものの由来は以下のような。当初の金井集落は下位段丘面の「下金井」だった。「金井」地名は群馬県下に多数あり、そのほとんどが製鉄の「金鑄」に由来するようだ。したがって当地(渋川市金井)も同じだろう、と。当地の史録初見は、永禄10(1567)年5月で「渋川ノ中金井郷ニ於……」。「金井宿」の町割は、江戸初期の元和8(1622)年から。

<sup>24</sup> 筆者は、2018年8月19日、金島ふれあいセンターを会場に渋川市教育委員会文化財保護課主催による、金井遺跡群活用事業シンポジウム「古墳人からなにが見えるか」(コーディネーター：群馬県立歴史博物館館長・右島和夫氏)とそれに先立つ見学会に参加した。その際訪れた、群馬県埋蔵文化財調査センター発掘情報館での創立40周年記念展示「金井東裏遺跡展」において、この4体のオリジナル人骨も視察できた(見学解説は、埋蔵文化財調査事業団専門調査役・大木紳一郎氏)。なお、遺跡発掘とこのシンポジウムに関係した専門家たち(右島和夫、原雅信、杉山秀宏、舟橋京子など)の研究成果は、『月刊 考古学ジャーナル 6月号—特集：火山灰に埋もれた古墳時代』第712号、ニューサイエンス社、2018年、にも収載されている。

<sup>25</sup> 前掲の金井東裏遺跡報告書(2019年春)が「古墳時代」に特化されているのは、この遺跡の下層に、さらに古い縄文時代前期(約5700年前)～弥生時代中期・後期の遺構の存在が確認されているからである(前掲の『古墳人、現る』、三二～三三頁)。「首飾りの古墳人」女性は——本文で後述するように——「齒」の科学分析から在地人ではないようだが、「金井」の古層には、より古い人文の歴史が眠っているのは確かであろう。

<sup>26</sup> 金島を含む渋川周辺(吾妻川と利根川の合流点周辺)の「馬匹生産」あるいは「牧」をめぐる研究は、飯田浩光「渋川市域における古墳時代馬匹関連遺跡の様相」、『群馬県立歴史博物館紀要』第39号、2018年、六九～七四頁、を参照。

<sup>27</sup> 前掲の『ふるさと渋川史帖』、二七六～三一五頁、を参照。大島氏はここで、2001年に渋川市教育委員会内で生じた「阿久津・地名由来碑」の碑文案案問題に触れつつ、『渋川市誌(古代編)』での「利刈牧」軽視(＝「有馬牧」への包括)に修正を加えている。氏は、自己の長年のフィールドワーク調査を勘案しつつ、『和名類聚抄』で「利刈郷」が「有馬郷」(渋川市有馬付近)と「白衣」(旧子持村・現渋川市白井付近)の中間に記されることに注目し、「利刈牧」は「その間となる渋川市北牧・南牧から吾妻川が利根川に合流する落合付近までの吾妻川右岸の地と島々が該当する」(同書、二七七頁)という。ここでは、中世の「鎌倉街道」(下金井に痕跡)が「利刈郷」比定地(大島説)を貫通することにも触れられ、古代～中世～近世という歴史的連続性の示唆がある。なお、吾妻川最下流の「阿久津」は、流路変化の激しい沼沢地だったことから「アクツ(悪津)」とされたとの説がある。ここは金井郷と渋川郷(そして対岸・白井郷)との境界に当たる。阿久津と白井の境界には、「利刈牧」最南端と目される中洲「真木(＝牧)島」も存在。左岸の断崖上に室町期・長尾氏の白井城跡がある。

<sup>28</sup> 行政区分の「金島(村)」名の起源は、1889(明治22)年4月、明治期の町村制施行にともなう「西群馬郡金島村」の成立による。「金島」は、金井・阿久津・南牧・川島・祖母島の合併で、金井の「金」と川島・祖母島の「島」を使った近代の合成村名。

<sup>29</sup> 「金井製鉄遺跡」は9世紀末の遺構だから、5～6世紀に遡る「金井東裏遺跡」・「金井下新田遺跡」の古墳人たちの製鉄文化(＝鍛冶技術の移入)と馬匹文化(＝牧の経営)の文化伝承の連続性／不連続性といった問題が残る。直接的な技術伝承を説くのは難しいが、榛名火山の鉄分の多い地質と関東平野の末端部という地勢が、この金井の地に、古来、製鉄と馬生産の両者を、地域特性のある技術として伝えてきたことは確かであろう。なお、金井製鉄遺跡は、段丘傾斜面を利用した「半地下

式堅型炉」であるが、それは関東・東北南部で8世紀初めに普及しはじめた形式の炉だった。半地下式堅型炉については、角田徳幸『たたら製鉄の歴史』吉川弘文館、2019年、二一頁。また、「金井下新田遺跡」で、多くの馬の痕跡（子馬も含む）とともに、大型の「囲い状遺構」のなかでの「鍛冶遺構」の発見があった。これは、5～7世紀には鍛冶工房が首長居館に附属していた（さらに、そこが畿内産の高級鉄製品の中継地だった）とする説と一致する。渡来系の「金井王」は、中央（畿内）から権力象徴たる高級武具を賜り、地元では日常使いの農具など作っていたのではないかと推察される。以上の説を含め、この時期の関東（主に荒川下流域）の製鉄文化をあつかった文献に、佐々木稔編著（赤沼英男、神崎勝、五十川伸夫、古瀬清秀）『鉄と銅の生産の歴史—古代から近世初頭にいたる』雄山閣、2002年（特に、佐々木稔・赤沼英男執筆の「Ⅱ—3 律令体制下での鍛冶活動の特徴」、五一～六八頁）、がある。弥生～古墳時代の鉄器文化（鍛冶・製鉄）については、野島永（広島大学教授・考古学）による各種論考がある。特に本稿との関連では、野島永『初期国家形成の鉄器文化』雄山閣、2009年、ならびに、同「（生産と流通Ⅴ）製鉄と鍛冶」、土生田純之、亀田修一編『古墳時代研究の現状と課題』下巻（社会・政治構造及び生産流通研究）、同成社、2012年、八九～一〇六頁、を参照。

<sup>30</sup> 前掲の『古墳人、現る』、一七六頁（座談会での右島氏の発言）、を参照。こうした「盟主的リーダー」（上毛野の大王）の下に、渡来系の「金井王」のような小地域のリーダーを束ねる「受け皿」的なネットワークがあった、とも。「保渡田古墳群」は100メートル級の3基の前方後円墳からなる（近隣に、内部に鍛冶遺構の残る古墳時代後期の豪族居館跡「三ツ寺Ⅰ遺跡」が存在する）。

## 付記

本稿成立の最終段階の2019年7月に、郷土史家・大島史郎氏（元渋川市誌編さん委員・専門委員歴史部会長、元渋川郷土史研究会会長）への直接取材が可能となった。これにより草稿段階での瑕疵を減じ、新たな学術的知見を盛り込むことができ

た。大島氏には深く感謝したい。なお、氏へのインタビューを含む現地巡検は、現在進行中の2019年6月採択共同研究プロジェクト資金（2019年度総合科学推進プロジェクト採択課題「〈みち〉と〈まち〉の風景をめぐる感性哲学—土地固有の地勢とその物語化の諸相—」：代表・桑島秀樹）の援助による。プロジェクト・メンバー各位（総科：柳瀬善治、渡邊誠、並木敦子、教育：熊原康博の各氏）ならびに広島大学大学院総合科学研究科の関係各位には、この場を借りて感謝申しあげたい（※よって、本稿は上記共同研究の成果報告の一部である）。その他、折に触れ、直接取材・電話取材に快く応じ、本稿執筆に協力いただいた渋川・金島地区の皆様ならびに他の各地の皆様にも、ここに改めて謝意を表しておく。

※なお、本稿・渋川金島紀行（2019年8月入稿）の抄版も収載の、司馬『街道をゆく』シリーズ群——アイルランド・オランダ・アメリカなど欧米篇、ならびに、滋賀・韓国・広島など東アジア篇——をあつかった、筆者による以下の一般書も出版計画中である。桑島秀樹『司馬遼太郎 旅する感性』世界思想社、2020年3月の刊行予定。